

仙台七夕まつり

華やかな七夕飾りの「たなばたさん」は仙台商人の心意気。
晴天のもと幾重にも重なり風にたなびく姿はまさに絶景です。

仙台七夕の歴史

江戸風の七夕をとり入れた仙台では、七夕まつりのことを「たなばたさん」といいました。仙台藩祖伊達政宗公は七夕に関する和歌を8首詠んでおり、この時すでに七夕の行事を取り入れていることがわかります。

戦後復活した仙台七夕まつり

終戦の翌年昭和21年(1946年)、一番町通りの焼け跡に52本の竹飾りが立てられました。当時の新聞には「10年ぶりの”七夕祭り”涙の出るほど懐かしい」の見出しで報じられるほどでした。

昭和天皇が巡幸された昭和22年(1947年)には、巡幸沿道に5000本の竹飾りが七色のアーチをつくりお迎えしました。それからの商店街が七夕隆盛にける熱意は、並々ならぬものでありました。

その後の七夕は、商店街振興から観光イベントへと変貌していきます。現在では飾りだけでなく、ステージイベントや飾りの製作体験コーナー、食の魅力がまるごと味わえるフードコートを設置した「おまつり広場」も人気を集め、名実ともに日本一のスケールを誇る七夕まつりとなり、毎年全国から訪れる観光客を楽しませてくれています。

豪華絢爛な笹飾り

仙台七夕まつりの特徴といえば、やはり毎年新に手作りされる豪華絢爛な笹飾りです。祭り前の8月4日早朝、各商店街では長さ10メートル以上の巨大な竹を山から切り出し、小枝をはらい、飾りつけの準備を行います。飾りは各個店の皆さんが数カ月前から手作りで準備し、一本の価格は数十万～数百万円もするといわれています。吹き流し5本1セットで飾るのが仙台七夕の習わしとなっています。



願いを込めた七つ飾り

仙台七夕まつりに欠かせないのが、七つ飾りといわれる小物たち。商売繁盛、無病息災など様々な願いを込めて、仙台では七つ飾りが飾られています。



吹き流し…織姫の織糸

昔の織糸を垂らした形をあらわし、機織りの名手である織姫を象徴しています。手芸や機織りなどの上達を願って飾られます。

たんざく 短冊…学問や書道の上達

かみごろも 紙衣…病気や災難の厄除け、裁縫の上達

おりづる 折鶴…家内安全と健康長寿

きんちやく 巾着…商売繁盛

とあみ 投網…豊漁・豊作

くずかご 屑籠…清潔と儉約



詳しくは「仙台七夕まつり」
ホームページをご覧ください。

